飛鳥山

〔日本書紀三十持統〕七年九月辛卯、幸多武嶺、

〔萬葉集九雜歌〕獻舍人皇子歌二首

挂手折多武山霧、茂鴨、細川瀬、波驟祁留、

〔日本書紀十二履中〕八十七年正月、太子到河内國埴生坂而醒之、顧望難波見火光而大驚、則急馳之、自大坂向倭、至于飛鳥山遇少女於山口問之曰、此山有人乎、對曰、執兵者多滿山中、宜廻自當摩侄踰之、

〔延喜式八祝詞〕祈年祭

山口坐皇神等能前爾白久、飛鳥石村忍坂長谷畝火耳無登御名者白氏、遠山近山爾生立留大木小木乎、本末打切氏持參來氏、皇御孫命能瑞能御舍仕奉氏、天御蔭日御蔭登隱坐氏、四方國乎安國登平久知食須我故、皇御孫命能宇豆乃幣帛乎、稱辭竟奉久宣、

〔書言字考節用集一乾坤〕龍田山又作立田、和州平群郡、

龍田山

〔玉勝間五〕立田山小ぐらの峯

いにしへ大和より難波へもいづくへも下るに越し、立田山は、今のくらがり峠也といふ說のあるは、その名、万葉九の卷に、小鞍嶺とあるに通ひ、又かの道ぞ、今の世にむねとこゆる道なれば也、そのうへそのあたりに、小倉寺村といふさへあるなれば、さもあらんとは思はれながら、立田神社と、ほどのいと遠きは、心得ぬことにおぼえしに、ある人の、立田山をぐらのみねは、くらがり越にはあらず、今の立野越なりといひ、又此ごろ師のいせ物がたりの古意のしりに附たる、上田秋成といふ人の考へにも然いひて、そのよしをくはしくわきまへたるは、まことにさることゝぞ思はるゝ、

〔日本書紀十二履中〕八十七年○仁德正月、太子於是以爲、聆少女言而得免難、○中略更還之、發當縣兵令從身、自龍田山踰之時、有數十人執兵追來者、